

いばらき原発県民投票の会 活動方針にもとづく振り返り

■ ミッション (果たすべき使命、存在意義。何のために活動するのか)

「民主主義の共通体験」のプラットフォームとなる

狭い意味での「民主主義の共通体験」としての、原発県民投票と投票に至るまでの県民同士の熟議は、条例案が否決されたために実現できなかった。

しかし、県民投票を求める直接請求運動を通して、原発再稼働の是非という重要な案件について、一人一人が意思表示したいという思いを、期間限定の精力的な署名活動によって県内全域に広げることにより、自分達こそが主権者であるという意識を高めることになった。

また、県議会の審議において、原発問題ではなく「民意を聞く」ことの検討を求めているという主張を貫いたことで、原発再稼働の賛否を超えて、県民投票に一定程度理解を示した議員が発生した。

さらに、県議会での審議がネットでも公開され、多くの受任者が傍聴した結果、条例案反対派の論理的破綻など茨城県議会の実態を多くの県民が知ることとなった。

以上の成果から、本会の活動は広い意味での「民主主義の共通体験」のプラットフォームとなり得たといえる。

■ ビジョン (将来像、夢、ゴール。ミッションを果たすとどうなるのか)

2020年の「原発県民投票」投票日に、

県民一人ひとりが、自らの選択を記した票を投じている

県議会で「条例案」が賛成5反対53で否決され、ビジョン達成には至らなかった。

(賛成：共産党2、立憲民主党1、無所属2、反対：いばらき自民党42、県民フォーラム5、公明党4、無所属2)

しかし、知事や反対会派も、再稼働の同意の判断に当たって県民の意見を聞く必要があると認めたことは成果である。(安全対策工事の完了時期が2021年3月から2022年12月に延期されたため、途中から投票日の目標を202X年と修正した。)

■ アクション (具体的な行動。ビジョンを実現するために何をするのか)

・ 条例制定のための直接請求に向けた、受任者／署名あつめ

→2019年3月スタート時点では受任者7,000人、署名14万筆を掲げたが、難航。

2019年8月時点で実質的な最低必要数として受任者3,500人、署名5万筆に下方修正し、市民活動団体だけでなく、政治団体・政党県支部へも呼びかけた。

結果、2019年12月末に受任者3,555人を達成し、2020年4月17日に署名約9万筆で提出、審査後86,703筆が決定され直接請求が実現した。

・ 県民一人ひとりの意思形成のための、対話と学びの場づくり

→ 「県民投票」に先立って求められる「熟議」について、「県民投票カフェ」やフェスを通し実際に体験する場を作り、具体的にイメージしにくい「熟議」への基本形が示せた。スタート時の開催目標、全市町村（44市町村）でカフェ開催、700名参加に対し、9カ月の間に39市町村、計75回開催、一般参加者だけで981名（運営側の参加者も含めると、のべ1,240名）が対話を実現した。

■バリュー （大切にしたい価値観。アクションにおいて何に気をつけるのか）

- ・ 原発への賛否や関心の高低に関わらず、
誰もが参加できる雰囲気をつくろう

県民投票カフェ・フェスにおけるプレゼン等では、原発への賛否両論を併記するよう心掛けた。しかし参加者には原発再稼働に反対する人が圧倒的に多く、「賛否に関わらず誰もが参加できる雰囲気」の実現が難しい場面も多々あった。

- ・ さまざまな立場の個人・団体・組織と、
等しい距離でゆるやかにつながろう

再稼働反対の運動ではなく「民主主義の確立を求める運動」であるという姿勢を堅持した結果、当初は理解がなかなか得られなかったが、「対話・熟議」を軸として県民投票フェス・カフェ等のイベントを粘り強く継続したことにより、最終的には広くいろいろな立場の人が党派を超えて参加した。

各地域に今回の運動への協力団体や協力者ができた。市民活動の経験がない人たちが署名活動に参加し、その人たちの団体(サークル)が各地域でできた。さらに、それらの団体同士の交流も始まった。

■スローガン （合言葉） 話そう 選ぼう いばらきの未来

- スローガン、ロゴともに、わかりやすくてよかった。



■その他

・あらゆるツールの活用

- 「オンライン・フェス」など様々なオンライン・イベントを開催、またコロナ禍でもリモートで定例会議を継続するなど、ICT活用の可能性を追求し、市民活動の実例を提示した。
- 動画「県民投票 VOICE」の配信を署名活動折り返し時にスタートし、半年間・毎週水曜日実施。
- 記者クラブでのレクチャーと、プレスリリースによる新聞・TVの報道
- フライヤー+アンケートポスティングによる受任者あつめ
- ポスター掲示による告知
- 公式ウェブサイト、Facebook、Twitterによる告知
- クラウドファンディングによる、活動の広報と協力者の拡大を図った。